

視野を広げるための思考訓練

真逆からの発想，非常識の有用性

以前、当コラムで、部下の視野を広げるためのプラクティカルな方法として、中国古典の『莊子』を読むことをお勧めしました。そのポイントは、真逆からの発想を心がけることでした。事象や物事を通常とは逆から捉えて、一般に常識と考えられている考え方が唯一の正解ではないことを知ることが、視野を広げる上で重要なポイントとなるということを紹介しました。

前回のコラムでも、他者の前でプレゼンテーションをする際には、できるだけ「常識」とは違った角度（説明の仕方，結論）からプレゼンを行うことが有用であると述べました。

常識とは違う発想をしようと思えば、当然「視野」を広げて考える必要があります。以下では、そのための有用な思考訓練を紹介しましょう。すぐに実践可能です。

自分自身に身近なこと

最近、大学で学生を教えていると感じるのは、物事を捉える視野や関心が本当に狭く、自分と直接関係がある身近なことに対してしか興味を示さないということです。

例えば、「何でもいいから、自分の関心の持っていることを挙げてみなさい」と指示すると、大半の学生は、自分が今取り組んでいるアルバイトや部活動などを題材として取り上げようとします。

自分から離れたことは・・・

もちろん、「何でもいいから」という指示なので、それで全然構わないのですが、何百人も学生を教えている、1人か2人程度は、より根源的な社会の時事的な問題やホット 이슈ーに関心を持っているような学生が居てもいいのに、と感じることがままあります。

例えば、最近であれば、「政権交代後に政治がどう変化したか」とか、あるいは「原発にはどういった問題が潜んでいる（いない）のか」とか・・・少し社会に眼を向ければいくらでもネタは転がっているはずなのに、そうした問題を取り上げようとする学生は皆無です。

要するに、最近の若い学生は、自分に直接関係していないような広く大きな問題は、考えようとしないう傾向にあるのです。そもそも自分とは違う世界だと思っているか、考えてもどうせわからないと高をくくっているかです。

眼が外へ向かない！？

このことを別の角度から見ると、最近の学生は、自分自身のことや自分の思いを述べることは、恥ずかしがらずに出来るのですが、自分以外のこと（他者，社会）を対象にした問いには急に寡黙になってしまう傾向がある、とも言えます。そもそも他者に関心が無い

とすれば致し方のないことかも知れませんが、社会的な話題を出そうとすると、急に冷めてしまい、コミュニケーションを遮断しようとしてしまう態度は残念至極です。

「なぜ」を、他者に当てはめて考える癖をつける

こうした学生に対し、私はいつも「(あなたではない) 他人は、なぜそういった行動をとったと思いますか?」と尋ねるようにしています。あるいは、人ではなくても仕組みや制度、法律等でもよくて「なぜ、そういった仕組みになっていると思いますか?」と尋ねるようにしています。

このような問いには最初は全然答えられないのですが、繰り返ししつこく問いかけていくことを通じ、次第に考えようとする態度を身につけてくれる学生が多いようです。数ヶ月もこの訓練を続けると、少なくとも「すぐにあきらめては駄目だ」ということは理解し、考えようとするようになっていきます。

他者・社会の中の自分という視点を

要は、こうした“自己中心的”な世界観の若者には、自分だけの世界から、他者も含めた自分の世界へと脱皮させてやらないといけないということです。自己を相対化し、客観的に見つめられるよう育ててやらないといけないのです。

そのためには、自分がどう思うかだけではなく、極力、自分以外の他者が、なぜそういう行動をとったのか(あるいは、なぜそうなっているのか)を問うてやることです。こうした訓練を粘り強く続けていくことで、ビジネスの世界に入ってから広い視野から物事を考えられるようになるはずです。

株式会社インソース <http://www.insource.co.jp/>

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-19-1 神田橋パークビル 5 階

TEL : 03-5259-0070 FAX : 03-5259-0075